

『王子と乞食』に見られる母親像

—母親としてのマイルズ・ヘンドン—

木村仁美

はじめに

『王子と乞食』(*The Prince and the Pauper*, 1881) が書かれた同時期にアメリカで流行していた家庭小説では、強く賢い母親が家庭を護っていくという展開が多く見られる。あるいは未熟な女性が試練を乗り越えよき妻、母となる¹。ところがトウェインの作品に登場する母親、母親の代わりとなる女性は家庭をうまくとりしきることができない。例えば『トム・ソーヤの冒険』(*The Adventures of Tom Sawyer*, 1876) で、ポリーおばさんはトム・ソーヤ(Tom Sawyer) にだしぬかれてばかりいる。『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885) では、ハック・フィン(Huckleberry Finn) の後見人となったダグラス未亡人(Widow Douglas) がハックの教育に失敗している。『王子と乞食』の場合、トム・キャンティ(Tom Canty) の母親は子どもたちを夫の暴力から救うことができない。彼女は、トムがいなくなると悲しんでばかりいる哀れな女性だ。

一方、物語には賢く強い母親の役目を全うする男性が登場する。マイルズ・ヘンドン(Miles Hendon) のエドワード王子(the Prince of Wales) に対する献身的な態度は、母親が子に対して抱く愛情と同一のものだ。家庭小説の中で理想とされた母親像とはかけ離れた母親、また理想の母親像の代わりとなる男性の姿を作者はどのような意図で描いたのだろうか。

本稿では、『王子と乞食』に登場する無力な女性たちと、マイルズ・ヘンドンの母性的性質について比較考察する。そして、王室におけるトムとオー

ファル小路の母親、エドワード王子とヘンドンとの結びつき、信頼関係を通して、作者が考えていた母子関係の姿と家庭を形成する男性と女性の役割を明らかにしたい。

第一章 無力な母親たち

トム・キャンティはオーファル小路にある小さく朽ちてぐらぐらした家の三階に父、祖母、母、双子の姉と六人で住んでいる。父親のジョン・キャンティとその母親すなわちトムの祖母は残忍で、機会さえあれば酔っ払い、理由を見つけては家族のものを虐待した。トムが物乞いの収穫もなしに帰宅すると父親がまっ先にののしりひっぱたく。続いて祖母がもう一度同じことを繰り返す。母親は夫と祖母が恐ろしくて暴力を止めることができない。彼女に出来ることは夜おそく「自分は食わずに飢えても」(5) トムにこっそり残飯かパンくずをもって来るぐらいだ。それさえ夫に見つかれば彼女は夫になぐられる。トムがぶたれるのを見ては心を痛め隠れて残飯を運んでは自分がぶたれるという繰り返しを母親はどうすることもできない。

母親たちは常に力の強い男性たちの手に委ねられている。まず法という権力のもとに貧乏な母親たちは魔女として片付けられる。例えば、王を演じるトムの前に連れてこられた母娘は靴下を脱いで嵐を起こしたと言われている。彼女たちは十二月の真夜中に荒れ寺で自らを悪魔に売ったらしい。執政長官によれば二人が寺の方に行くのを見たという者がいた。各地で嵐が起こったのは二人が悪魔に魂を売ったという証拠であり、その嵐で皆が被害を受けたのだから二人の墮落は間違いないと執政長官は言っている。トムはその母親に「あなたの力をふるってみてください。ぼくは嵐を見たいのです」と命じ、嵐を起こせば釈放させようと約束する。母親は涙を流して、「奇跡を起こす力はない、そのような力があれば陛下の命に服します、そしてこのようなもったいない恩赦がいただけるとしたら、喜んで子どもの命だけを助けていただき、自分の命はなくなっても満足だ」(133)と訴える。トムの機転で彼女たちを救えなければ貧民階級の母娘の命が助かる見込みはなかった。

次に、エドワード王子と同じ牢に入れられ鎖につながれていた二人の母親が挙げられる。二人はバプテリスト派信者であるために火刑となる。彼女たちは、なぜ牢に入れられたのかというしつこい王子の質問に容易に答えることはしない。彼女たちを支配するのは法であり法を作った王である。王は異端者の弁明を聞くことはしない。話せば話すほど彼女たちは魔女として罪が重くなるのである。女性たちは自らの立場を知っていてそれに抗うことはしない。

また、盗賊の一人ヨーケル (Yokel) の主張によると彼の母親も魔女だとされて処刑された。ヨーケルはかつて裕福な百姓で妻子がいた。今では彼が独り生き残っている。彼の母親は病人の看護をして働いていた。病人の一人が原因不明で死んだため母親は魔女にされた。妻は物乞いをしたために鞭打ちの刑で死に、子どもは飢え死ぬ。ヨーケル自身は物乞いを繰り返し奴隷に売られると頬に焼きごてを押されている。さらに他の盗賊の中にも最近殺されたウエンの祖母は手相観と占いがうまいために魔女だと言われて処刑されている。彼女たちは皆生活の糧にしている仕事のせいで命を奪われている。

負けん気が強く、威勢のよい母親たちも権力には押さえつけられてしまう。ヨーケルの母親はたくましい女性と断言している。彼女は貧乏という苦境に屈せず看護師の役目を果たしていた。弱い者を助け同時に家族を養おうとする母親としての生活の智恵が発揮されている。ウエンの祖母はさらにたくましい。「やっかいで陰険な根性の持ち主」(148) だった彼女は火刑にされている最中でも野次馬たちに悪態をつき、ののしっている神経の太さである。この老女たちは、道徳観念の有無は別として、少なくとも権力に対してひるむことはなかった。それにも関わらず彼女たちは男性によって造られた法のもとに命を奪われる。

物語に登場する全ての母親が女性の持つとされる愛情の深さを備えているわけではない。愛情とは正反対の性質を持つ残忍な母親もいる。トムの祖母、ジョン・キャンティの母である。この「灰色のばさばさになった髪をして意地悪い目つきのしなびた醜い老婆」(65) は子どもたちや家族に危害を加え

ることを楽しみとしている人間だ。老婆は物乞いで働く気はない。家庭を温かい憩いの場にしようという考えは全くない。この性根が悪く家族に害悪を及ぼすようなジョン・キャンティの母親でさえ『王子と乞食』において無力で不幸な母と言える。なぜなら老婆は息子であるジョンの、家庭における支配力のもとに存在しているからだ。

社会的地位があり富のある女性も必ずしも権力を手にしているとは限らない。例えば、エドワード王子の母親、つまりヘンリー八世の後であるジェーン・シーモアは、産後の肥立ちが悪く亡くなっている。一説にはヘンリー八世の先妻で王によって処刑されたアン・ブリーンの呪いによるとも言われている。アンはヘンリー八世に見初められ侍女から後の位を得た。しかし世継ぎを生むことができなかつたアンを後の座から追放するために、王は不倫騒動を理由にして彼女を処刑した。その後釜がジェーンであり、アンの魂に妬まれたとされている。貧乏とは縁遠いと思われている王室にあってさえ女性たちは権力を持つ男性に支配される存在でしかない。

これら物語に登場する女性たちを見ると母親たちには名前がない。残忍なジョン・キャンティの母親にも名前がない。ヘンリー八世の妻たちの名前さえも物語の中では触れられていない。彼女たちは、だれかの母親ということでひとくくりにされ、家族、社会において一個人としては認められていないのだ。『王子と乞食』における母親は語り手によって無能で無力に描かれているようだ。

第二章 母親としてのマイルズ・ヘンドン

マイルズ・ヘンドンはぼろを着たエドワード王子の母親代わりを担っている。ヘンドンがエドワードの父親としてだけではなく母親の代わりをしているというのは、彼に多分に女性的な性質が見られるからだ。まず、彼は疲れきったエドワードに衣食住を提供する。疲れきった少年を自分の部屋に連れていく途中、ヘンドンはすぐに温かい食事ができるよう手はずを整える。彼は自分のベッドで倒れこむように寝ているエドワードを起こさないように気

を使う。彼はエドワードの「ほほをやさしくつつき、もつれた巻き毛をなでつけながら思いやりのある同情的な関心をもってじっと見た」(90)。そして「この子を持ち上げてベッドの中に入れてやったら起こしてしまう」(91)からと自らのダブレットを脱いで少年をくるんでやる。ヘンドンのしぐさは小さな子どもをかわいがる母親の姿そのものだ。

それから彼は今度は、町で子供用の古着を買ってくるとエドワードに見合った寸法に自分で作り変える。針仕事は女性の仕事であり男性のヘンドンにはなかなか針に糸が通せない。ヘンドンは我慢強いので女性が針に糸を通すやり方どおりに「針を動かさず、糸を通す」(102)ことを何度も試みた。そして彼は古着を立派な服に仕立て直す。

ヘンドンが女性らしいという最たる特徴はエドワードに対する犠牲的な愛情に満ちているからだ。ヘンドンは何の報酬を求めることなくエドワードの面倒を見ようと決心する。ヘンドンはギルドホールの前で群衆に嘲笑されていたエドワードを助け、父親と名乗るジョン・キャンティの手から少年を救う。ヘンドンの着ているものは上等な素材で出来ていたが色褪せてすり切れている。彼の身なりからとてもこの人物が一人の子を養っていける立場の人間ではないと読者には察しがつく。自らの生活にも事欠く状態であるに関わらず、ヘンドンは無条件で子どもをかくまうのだ。

ヘンドンの外見容姿に女性らしさはない。彼は背が高く筋肉質の体格をしている。怒ると長剣をふりまわしエドワードに危害を加えようとする暴徒連中に向かっていく。話し方は上品とは言えず、誤ってエドワードを盗賊の手に渡してしまった下宿の下働きの男を衝動的に怒鳴り散らす。こうした時のヘンドンの所業はジョン・キャンティ、ヘンリー八世といった『王子と乞食』の中では事の解決を腕力や権力といった力に訴える父親像と重なるかもしれない。

ところが、ヘンドンの粗雑さと気の荒さはジョン・キャンティやヘンリー八世の横暴さとは性質を異にする。彼が腕力と権力を行使する時はいつでもエドワードを利用しようとする腕力と権力から護る時だ。言い換えるとヘン

ドンは自らの欲望や利益のために力に訴えることはない。例えば、村の女性から十三シリング八ペンスの食用豚を八ペンスで横取りした巡査にヘンドンがおどしをかける場面がある。女性は盗賊のヒューゴが盗んだ豚をエドワードが盗んだと思いこみ、少年を訴えた。彼女は「十三ペンス以上の値打ちのものを盗んだとき法では絞首刑になる」(203) ことを知らなかったのだ。これを聞くと女性は後悔し、豚の値段を訂正してくれるよう裁判官に願い出る。エドワードの処置は「むち打ち刑があとに続く一般牢への短期留置」(204) に格下げとなった。裁判官が記録簿に八ペンスと記入したので女性は安心して豚を返してもらい、出ていった。そこへ後をつけた巡査がその女性を恐喝して上等な豚を奪い取る。ヘンドンは隠れて巡査の汚いやり口を聞いていた。巡査の秘密を知ったヘンドンは巡査がしたように誰もいない場所でエドワードを見逃さなければ秘密をばらすと言っておどしつける。ついでに豚もとりあげた。ヘンドンの巡査に対する行為だけを見れば恐喝そのものだ。しかし、読者はヘンドンがいかにか危険を顧みずエドワードのためだけに力を行使しているのかをみてとることだろう。

またヘンドンはエドワード以外の者が法の定めに従って残酷な刑が執行されるところを目の当たりにしても動じない。エドワードに親切にしてくれたバプティスト派の女性たちが火刑になる場面がある。エドワードは絶えられずに杭に縛られた彼女たちから目を背ける。彼は「ぼくがこの一瞬に見てしまったことは、ぼくの記憶から絶対消えないでこびりついて残るだろう。死ぬまで毎日毎日目にちらつき、夜毎に夢に見ることになるだろう。神よ、ぼくが盲目ならよかったのに」と言って悲しんでいる。エドワードは全権の保持者であるはずの自分が全く無力であることに気がつき落ち込むのだ。エドワードのつぶやきを聞いたヘンドンは、少年の「乱心が直った」(237) と満足している。ヘンドンは子どもと引き離され無残な死に方をした女性には全く注意を払うことがない。彼のエドワードに執着する姿は息子のことだけで頭の中をいっぱいにし一喜一憂するトム・キャンティの母親そのものだ。ヘンドンがエドワード以外の人物に示す横暴、無関心は彼のエドワードに対す

る献身、愛情といった女性的側面の歪みだということができる。

このようにヘンドンの男性的側面は彼のエドワードに尽す女性的側面を助長するかのようには誇張されて描かれる。彼は後先を考えずに危険を冒し、悲惨な光景に動転することもない。これは力のままに行動する男性的側面だ。一方でその自殺行為とも言える行動はエドワードに対する、利害関係のない純粋な愛情から自発的になされている。例えば、ヘンドンが無実の罪で受ける非情な刑は一度だけではない。彼はエドワードに課せられた刑まで進んで引き受ける。まずヘndonは「頑強な無宿者と称されそういった汚名にふさわしいことと、ヘンドン・ホールの当主に襲いかかったかどでさらし台に二時間さらされる刑」(238)を受ける。それを見て憤慨したエドワードが騒いだためヒューが少年にむち打ちの刑を命じる。ヒューはヘンドンがエドワードの身代わりになることを見込んでけしかけたのだ。ヒューの思惑どおりヘndonは「わたしが代わりにむちを受けようじゃないか」(241)と言う。果たしてヘndonはさらし台の刑に加えて、十二回のむち打ちの刑に処された。この姿はまさにトムのかわりにジョン・キャンティの打ちやくに耐える母親の姿であり、娘を残して火刑にされたバプティスト派の母親の姿に重なる。著者はなぜこのようにヘndonを男性的な側面と女性的な側面の両方を兼ね備えた人物にする必要があったのだろうか。

第三章 理想の母親像と家庭における男性の役割

十九世紀に流行した家庭小説の特徴を見ると、物語に描かれた理想の母親像には信仰心と道徳心、そして教養を備えた賢い女性の姿がある。彼女たちは、妻としても母としても模範的女性 (True Womanhood) であると同時に、自らの意志をしっかりと持った女性である。また彼女たちは夫、父親を敬い、子どもたちに「正しい」しつけをすることができる。例えば、『若草物語』(Little Women, 1868)におけるマーチ夫人は四人の姉妹たちを父親不在の不安と恐れから力強く守る気丈な母親だ。

こうした完璧な母親、或いは母親となっていく女性には家事も子育ても完

壁な万能の人物として描かれている場合も少なくない。一方『王子と乞食』に見られる母親たちは子供たちに対する愛情は深いが理想の家庭を築くには無力であるという致命的な欠点を持っている。彼女たちは夫と子どもの世話をする奴隷にすぎない。

また家庭小説と言われる物語の中で父親、夫、兄弟といった男性たちはしばしば不在である。彼らは旅に出たり仕事で遠方に出かけていたり蒸発している場合もある。また周囲の女性たちに重荷となるような状況のときでさえ²、彼らは「その内にある善の部分によって助長されるべき存在」³として描かれる。その結果女性たちは男性がどのような人物であっても夫、子どもの父親から妻、母親であることの意味を学ぶ展開になっている。したがって、家庭小説の中では理想の母親が子どもたちの父親を尊重する姿勢が必然となってくる。これに対してトゥェインは母親の代役をこなす男性を描いている。これは作者が家庭小説という時代の流行に対抗した現れだと思われる。トゥェインは母親の代役となる男性たちを、強く恐ろしい父親たちを敵にまわしながら子供によい影響を与える存在として描いている。

まずヘンドンはこれまで見てきたとおりでエドワードに対する愛着心が異常なほどだ。彼の経歴は貧乏で無力な女性たちのように惨めで虐げられたものだ。ヘンドンは裕福なサー・リチャードの次男として生まれながら、卑劣な心の持ち主である実の弟ヒューに遺産も恋人も横取りされ領地から追いやられるからだ。そして七年間の捕虜生活の末、ヘンドン・ホールに帰ってみると彼をよく知る者さえよそよそしい。かつての恋人イーディスまでもがヒューの奴隷となっている。そのことに気がついたヘンドンはヒューが社会的権力を乱用する人物であることを考えもせず彼の罪を責めたてた。ヘンドンは再び囚われの身となってしまう。

次にトムにラテン語と読み書きを教えてくれたアンドリュー神父がいる。神父はもともと王にほんの少しの年金をもらって、追い払われたためオーファル小路に住んでいる。逆境にめげることなくアンドリュー神父は「子どもたちをよく集めてはひそかに正しい道について」(4) 教えている。トムは

彼から読み書きの他に愉快的な昔話と言い伝えを聞いて幸せな気持ちで時を過ごすのである。彼ら二人の男性が少年たちの母親代わりをしているのは明らかだ。

一方エドワードが会おう隠者については、話がもう少し複雑である。隠者は自分のことを大天使だと信じている。彼は国王に僧院を壊されたので宿無しとなり人里離れた森の中で暮らしている。隠者は正気するとき、疲れきったエドワードを毛布にくるむと「母親のように」(183) やさしいことばをかけながら寝かしつける。一方で彼は王に対する復讐の念をその息子であるエドワードに向け、のどをかききろうとする人物だ。このような隠者が、母親の代役という主張は信憑性を削ぐかもしれない。しかし、母親らしい側面を見せる男性との関わりの中で少年たちがどのような反応を示すかを考えると、この隠者すらもが母親の代役をする男性の一人と位置づけることができるように思う。

まずヘンドンに出会ってからのエドワードの王としての認識を確認しておこう。特にエドワードの刑をヘンドンが身代わりになったときから少年の内面的成長は目覚しい。ヘンドンの身代わりによってエドワードの心の中には何かが砕けたと語り手は言っている。エドワードはそれまで王としての体面を殊に重んじていた。ほろをからかうクライスツホスピタル (Christ's Hospital) (24) の少年たちの教育のなさを王に対する侮辱だとみなし、「うすのろ王一世」(“Foo-foo the First, King of the Mooncalves”) (153) と言ってブリキの洗面器をかぶせてはやし立てた盗賊たちを陰険だと思い涙を流した。そして今も身代わりになってむち打たれるヘンドンを前に、エドワードは「王子を恥辱から救うヘンドンの行いの重さ」(241) と比べたら自分が傷ついたり死んだりすることはたいしたことではないと心の中で言っている。「王子の恥辱」と死を比較する点だけを見ればエドワードはそれまでと同じ王の権威を最重視する王室の人間にすぎない。

しかしエドワードはヘンドンのなりふり構わず人を助けるという勇敢さに忠誠心以上のものを感じたことは確かだ。彼はヘンドンのことを「勇敢な心

を持った人」(241)だと心の中で言っている。そしてヘンドンに伯爵の位を与える理由をエドワードは「どんな王でもあなたに爵位を呈して偉くさせられる王はいない。なぜなら王たちより高位にある神がすでにそれを与えているのだから。けれどあなたの持っている高貴さを王は家臣に広めることができる」(242)からだと言っている。つまりエドワードは王の権力など虚飾以外の何ものでもないことを悟っている。エドワードはヘンドンの自己犠牲的な行為を目の前にしたとき、それまでエドワードの全ての基準であった王室という世界が男性の作った権威者のための安全地帯にすぎなかったことに気がつくのだ。

次にアンドリュー神父とエドワードとの結びつきを考えよう。神父はエドワードをかばって命を落としたにもかかわらず直接王の感謝の念を受けることはなかった。エドワードは誰が自分を助けてくれたのかを知るきっかけがなかったからである。アンドリュー神父はジョン・キャンティがエドワードを棍棒でうちのめそうとするところを飛びかかって止めた。邪魔をされたと思ったキャンティは相手が誰かも確かめずに棍棒を振り落とす。オーファル小路の大衆は「泥酔、暴動、口論」(5)が日常茶飯事なので気にも留めていない。偶然とは言えアンドリュー神父は亡きヘンリー八世に追放されておきながらその王子を助けた、まさに無心の境地にある聖人そのものだと言えるだろう。エドワードはアンドリュー神父の存在さえ最後まで知ることはなかった。アンドリュー神父とエドワードが面識を持つことはなかった。しかし神父はそれから後、エドワードが自己犠牲的な人物、すなわちヘンドンに救われることを暗示させる人物だ。

最後に浮浪者と思われたエドワードが試練に合うことで身につけていった心根は隠者にも向けられている。注目すべきなのは自分を殺そうとした隠者に対してエドワードは憎しみを抱いたとは言っていない点だ。彼はジョン・キャンティを悪党だと思っていたが、隠者に対してはそのような認識がなかったのだ。それは無力な一宗教人に及ぶ王の権力の不当さを子どもながらに感じたためかもしれない。隠者ははじめから気が触れてはいなかったはず

だ。少なくとも隠者に手足を縛られ包丁を突きつけられたエドワードは、王という権力が何の役にもたたないことを見せ付けられることになった。

これらの男性たちは確かに幼いエドワードの心の内をそれまでとは違う境地にさせている。言い換えれば、母親を持たない少年は母親のような愛情を持つ人物に会うことによって、内面的成長を遂げたのだ。不思議とエドワードが試練を乗り越えて身につけたものは相手を思いやれる女性らしい心根だ。例えば彼は明らかにヘンドンと出会った頃に比べると衝動的に口を開く回数が減っている。窮地に陥ると王の権威を隠れ蓑にしようとする習慣もウエストミンスターに戻るころにはなくなった。

母親を持たないエドワードが母親の代わりとなる人物に出会ったときに内面的成長を遂げたのとは反対に、偽の王となったトムは実の母親を失いかけた時にはじめて内面的成長を遂げている。トムの内面的成長を見る場合、彼が母親を最愛の人だと気がつくところから、『王子と乞食』が単に無力な母親を軽視して母親代わりとなる男性を称えた物語ではないとわかるだろう。少なくともトウエインは母親の代わりができる男性の姿を誇示しながら母親である女性の立場も決してないがしろにしなかったと言える。トムは戴冠式に臨むころ、母親のことも姉たちのことも忘れていた。「彼女たちの悲しげでとがめるような顔が目の前に現れるときはいつも、うじ虫がはいまわるよりも卑しい」(252)と感じている。そのトムが馬上から見える民衆の中に子を見つけた「喜びと愛しさでくしゃくしゃにした顔」(258)の母親を見つけた。トムは家族を忘れ、うとましいとさえ思っていた自分がみじめになる。「自尊心はこなごなの灰に帰し不正に手に入れた王位の名誉も傷つけられるような恥ずかしさに襲われた」(259)と書いてあるとおりだ。

トムが母親を裏切ったという念に駆られてからの自立心は目覚しい。彼ははじめ独り王子の私室に残されたとき、自分が本当の王子ではないと分かれば絞首刑になるかもしれないという不安と恐怖でいっぱいだった。レディ・ジェーン・グレイの前でもヘンリー八世の前においても自分が「貧乏人の生まれの臣民の中でも一番卑しい者」(33)であることをわからせようと必死

になる。それがひとたび戴冠式の席で本物の王が現れると今まで王に成りすましていた罪の返報も恐れない。彼はひたすらにエドワードが本物の王であることを辛抱強く証明しようとする。

事の始まりをたどれば二人の立場をとりかえようともちかけたのはエドワードだ。王の一存でトムは王位剥奪の罪で罰を受けることも絞首刑になることも在り得るのにエドワードの弁護をする。トムの周囲の反応をものともしない行為は、彼が母親の自己犠牲的な愛情の重さを確実に意識していたからに違いない。

トムがこれほどまでに母親の重要性に気がついたのは、彼女が群衆をかきわけ馬にまたがったトムの足を抱きしめて喜んだためではなかった。むしろ母親に気がついた瞬間トムは驚き衝動的に「この人は知らないよ」(259)という言葉が口からでかかった。それから近衛兵の士官に押し戻され群集に飲み込まれていく母親のひどく傷つき胸が張り裂けそうな様子をトムは見る。このときになってやっと彼は「良心のとがめに心がかきむしられる思い」に襲われ、神に「囚われの身から自由にしてください」(259)と祈ったのだ。つまりトムはこのとき王の権威と見返りを求めない母親の愛情を無意識のうちに天秤にかけた。トムは形では示すことができないものの価値を悟った。トムは奪われてはじめて母親の愛情がかけがえのないものだということに気がついている。

このように少年たちは実の母親に欠けているものを補うことで内面的成長を遂げるとともに精神面においての安定も取り戻していると言えるだろう。特にエドワードの気まぐれは母親不在がもたらす心のひずみであったということが出来るかもしれない。彼はもともと気分と衝動に任せて物事を判断しがちであった。王宮を飛び出してからはトムを王位剥奪者としてさえ憎むようになっている。新国王誕生の知らせを聞いたときは、「貧乏人のトム・キャンティがこの機会に乗じてわざと王位の篡奪者になった」(75)と早合点する。戴冠式に飛び込んでいったエドワードが「あの偽者の頭にイングランドの王冠をのせることは許さない。わたしが国王だ」(267)と怒りの叫びをあ

げているとおりだ。

ところがトムがエドワードの身分を証明するために国璽のありかを賢明に思い出させる努力に必死であることがわかると、たちまち彼のトムに対する憎しみは消えうせる。さらにエドワードが無事王位につくことができると彼はトムの勇気と智恵を賞賛して止まない。エドワードの気まぐれには疑問が残る点であるが、少なくとも、欠陥のあった母親の位置に修正がなされると少年たちは心穏やかな状態でいられるようになったと言えるのだ。

『王子と乞食』においてトウエインは母親の代わりとなれる男性を描こうとした。それは時代の読者が要望する美化されがちな女性の姿に疑問を投げかけようとしたからだ。だからと言って作者はトムの母親をはじめ男性の権力に支配された女性たちの無力さを軽蔑したわけではない。彼は家庭小説に描かれるあまりにも誇張された理想の母親像になぞって女性らしさを発揮するヘンドンという人物を創造した。そこには女性作家たちと女性読者に対する作者の皮肉の混じった感情があったはずだ。女性読者と子どもたちを喜ばせる体裁をとりながら男性の存在を主張した『王子と乞食』は、トウエインの女性を見る歪んだ視点を垣間見ることができる作品と言えるだろう。

注

- 1 佐藤宏子の『アメリカの家庭小説』では、理想の家庭を形勢する母親像としてスーザン・ウォーナー (Susan Warner) 作『広い広い世界』 (*The Wide, Wide World*, 1851) のエレン・モンゴメリー (Ellen Montgomery) やマリア・カミンズ (Maria Cummins) 作『点灯夫』 (*The Lamplighter*, 1854) のガーティ (Gertrude, Gerty) などを挙げている。
- 2 エリザベス・スチュアート・フェルプス (Elizabeth Stuart Phelps) の『右肩の上の天使』 (*The Angel Over the Right Shoulder*, 1852) では一見妻に協力的な夫が描かれる。妻は夫の提案によって小説を書くという元来の夢を実現しようとするのだが結局家族の世話にあけくれる。妻の希望が実現できないのは夫の未熟さが原因だったのだ。夫は妻の足手まといとなっていた。
- 3 佐藤宏子『アメリカの家庭小説』(p. 75) では、この考え方が十九世紀の女性たちの信念を反映していると言う。

参考文献

Stahl, J. D. *Mark Twain: Culture and Gender*. Athens: The University of Georgia Press, 1994.

Twain, Mark. *The Prince and the Pauper*. Berkeley: University of California Press, 1983.

佐藤宏子 『アメリカの家庭小説』 東京：研究社、1987.